

今年冒頭にオーストラリア国家の歌詞の一部が変更された。二〇世紀初頭に英国から独立したが、国歌は英国の「ゴッド・セーブ・ザ・クイーン」であった。一九八四年に現在の「アドヴァンス・オーストラリア・フェア」に変更されたが、その歌詞の一部の「ウィ・アー・ヤング・アンド・フリー」が「ウィ・アー・ワン・アンド・フリー」に変更されたのである。

一八世紀後半以後に英国から入植してきた人々にとっては二三〇年程の歴史であるし、連邦国家になってからは一二〇年程の歴史しかない若い国家であるからヤングは妥当であったが、数万年前から生活している先住民アボリジニにとっては自分たちの歴史が無視されるような歌詞であり、その要請による変更である。

このような人種・民族・宗教・性別などによる差別や偏見の表現の訂正をポリティカル・コレクトネス（政治的正当性）といい、一九八〇年代からアメリカに登場した。その結果、チェアマンはチェアパーソン、カメラマンはフォトグラファー、キーマンはキーパーソン、メリー・クリスマスはハッピー・ホリデーズに変化した。

これらの言葉の訂正だけではなく、差別のある状況自体を是正することをアフアーマティブ・アクション（積極是正措置）と表現するが、この動向が世界を席巻しはじめている。二月中旬、東京五輪大会組織委員会長が女性差別を連想させるような発言により交代したが、昨今の情勢からすれば当然の結末であった。

この事件が象徴するように、日本はアフアーマティブ・アクションに出遅れている。顕著な出遅れは男女の格差である。日本で女性が選挙に参加できるようになったのは一九四五年で世界の二八番目であったから、それほど後進でもなかったが、最近の様々な指標を総合した男女平等の指標では出遅れは否定できない。

世界経済フォーラムが一四の指標で世界の一五三カ国の男女格差を評価しているが、日本は国会議員の女性比率が一三五位、女性の管理職従業率が一三一位、勤労所得の男女比率が一〇八位などであり、総合して二二一位というのが現状で、G七では最低、アジアでもフィリピン、インドネシア、中国、韓国よりも下位である。

このような日本の状況は現在の世界の主流の風潮では後進であることに異論はないが、注意すべきことがある。生物の世界では多様という特性が重要とされる。酸素を生産する植物と消費する動物が存在して大気の状態が維持されているが、酸素を消費する生物のみの世界になれば、地球の生命圏域は維持されない。

ここからは説明に注意が必要であるが、自然界でも役割分担が存在するように、人間世界も多様な役割を分担する人間が相互に依存する構造にしなければ維持されない。一九六〇年代のウーマンリブ運動が長期に社会に影響しなかったのは多様な特性が相互依存する構造を創造できなかったからである。

一九九〇年代からアメリカで次代の国力を模索する議論が活発になった。賛同されたのは武力・財力の時代から魅力の時代に移行するという見解であった。魅力とは他者に共感される能力である。これであれば性別・年齢・民族・母国など既存の枠組みに関係しない多様な存在が共存する人間世界の構築が可能となり、日本の格差是正の目標となりうる。